



# チーム躍進の背景に 「自主性と言語化」あり!

## ボクシング部 関東大学リーグ1部で 21年ぶりの“復活”勝利

学生記者 吉田未来(理工3)

法政大戦で勝利した渡辺龍大選手(リング中央)を大歓声包んだ=2024年6月8日、後樂園ホール(ボクシング部提供)

ボクシング部が2024年5～7月に開催された関東大学リーグ1部(6校総当たり戦)で、2勝3敗の戦績で4位となった。1部リーグで「1勝」を挙げたのは実に21年ぶりだという。躍進の最大の要因として、チームのテーマに掲げる「自主性と言語化」があった。多摩キャンパス第一体育館のボクシング道場で、渡辺龍大選手(前主将=経済4)と牧野蓮選手(前副主将=商4)、森貞宏太選手(主将=商3)の3人から、競技への取り組み、復活の経緯などを聞いた。



右ストレートを繰り出す森貞宏太選手(右)(ボクシング部提供)



駒澤大戦での牧野蓮選手(右)(ボクシング部提供)

ボクシング部は2023年7月、ともに部OBである岩渕雄介監督(2017年卒)、河口周悟・組織統括コーチ(同)というフレッシュな指導体制へと刷新され、新体制1年目のテーマに「自主性と言語化」が掲げられた。

### 競技への意識の深化

ボクシング部には伝統的に自主的に競技に取り組むという姿勢が根付いており、「自主性」は比較的わかりやすかった。ところが、「言語化」は「最初はよくわからないというのが本音だった」と渡辺選手は話す。ただ、「たとえば何ができて、何ができていないのかや、リングでの一つひとつの動きを考える指導を受けられた」と振り返り、「何かをできるようにするため、どう取り組めばよいか」といった競技に対する意識の“深化”につながったという。

「自主性と言語化」の意識、考え方が浸透するにつれ、部

員たちの思考にも変化が生じた。森貞選手は「相手の動きを観察し、パンチを打ち込もうとするときの癖を見抜いて、パンチを返す。当たるパンチには理由があるんです」と、戦術を言語化して理解する大切さを説明する。

牧野選手は「漠然と取り組んでいたボクシングをさまざまな角度から見ることができるようになった」と言語化の効果を説明し、さらに「チーム全体で話し合う機会が増えた。そうした積み重ねがチームとしての成長や、今回の勝利に結び付いた」と受け止めている。渡辺選手は「コーチだけでなく後輩や同期にも、皆が積極的にアドバイスをもらうようになっていった」と変化について語った。

### チームメイトとの絆 団体戦への闘志

ボクシングをはじめ、相撲や柔道、剣道など、一対一で戦う「個人戦」の競技は少なくない。団体戦(チーム戦)

## 中央大学ボクシング部

1930(昭和5)年創部。岩渕雄介監督、河口周悟・組織統括コーチ、森貞宏太主将。監督とコーチはともに2017年卒のOB。部員数24人。関東大学リーグの1部優勝が目標。過去には五輪金、銅メダリストを輩出している。

### 2024年度第77回関東大学ボクシングリーグ1部成績

- |       |      |         |
|-------|------|---------|
| ① 駒澤大 | 4勝1敗 | (勝ち数33) |
| ② 東洋大 | 4勝1敗 | (勝ち数31) |
| ③ 拓殖大 | 3勝2敗 | (勝ち数20) |
| ④ 中央大 | 2勝3敗 | (勝ち数20) |
| ⑤ 法政大 | 1勝4敗 | (勝ち数17) |
| ⑥ 日本大 | 1勝4敗 | (勝ち数14) |

(注) 関東大学ボクシングリーグ戦の公式サイトより抜粋

### 関東大学ボクシングリーグ戦

毎年5～7月に後楽園ホール(東京都文京区)で開催される大学対抗のリーグ戦。1部リーグは選手9人同士による対戦、2部は7人同士の対戦。3分3ラウンド制。関東ボクシング連盟主催。3～5部はトーナメント方式で行われる。

第77回関東大学リーグ1部(東京・水道橋 後樂園ホール)

中央大学成績

★第1戦(5月11日) 中央大(1-8) 東洋大

ミニムム級	波多野 陽 (WP)	○ 古藤 昇大
フライ級	柿沼 力生 (WP)	○ 中居 真壮
バンタム級	山川 空蒼 (DISQ)	○ 谷川 寿貴哉
フェザー級	木村 琉雅 (RSC)	○ 大原 寧王
ライト級	○ 森貞 宏太 (WP)	大園 丈太郎
ライトウェルター級	渡辺 龍大 (WP)	○ 秋元 啓介
ウェルター級	牧野 蓮 (WP)	○ 黒田 丈二郎
ライトミドル級	高橋 慶翔 (RSC)	○ 瀬井 りゅう
ミドル級	中島 鉄人 (WP)	○ 黒部 竜聖

★第2戦(5月25日) 中央大(4-5) 日本大

ミニムム級	○ 波多野 陽 (WP)	平井 胤充
フライ級	柿沼 力生 (WP)	○ 川下 豪
バンタム級	山川 空蒼 (RSC)	○ 野添 碧澄
フェザー級	伊達 勇次郎 (RSC)	○ 井上 偉心
ライト級	○ 森貞 宏太 (WP)	中里 陽向
ライトウェルター級	渡辺 龍大 (RSC)	○ 佐々本 祥吏
ウェルター級	○ 牧野 蓮 (WP)	村中 混希
ライトミドル級	○ 渡邊 柁弥 (RSC)	増田 祐士
ミドル級	中島 鉄人 (RSC)	○ 鎗田 怜次郎

★第3戦(6月8日) 中央大(6-3) 法政大

ミニムム級	○ 波多野 陽 (RSC)	西村 大歩
フライ級	○ 柿沼 力生 (WP)	金澤 大和
バンタム級	柴田 玲央 (WP)	○ 溝口 勢十朗
フェザー級	○ 篠田 立輝 (WP)	大隅 零生
ライト級	○ 森貞 宏太 (WP)	円谷 健聖
ライトウェルター級	○ 渡辺 龍大 (WP)	小池 立騎
ウェルター級	○ 牧野 蓮 (RSC)	松久 優作
ライトミドル級	川端 響喜 (WP)	○ 本名 駿
ミドル級	佐々木 巖 (WP)	○ 木場 海星

★第4戦(6月22日) 中央大(5-4) 駒澤大

ミニムム級	波多野 陽 (WP)	○ 金谷 成留
フライ級	(不戦敗)	○ 平塚 駿之介
バンタム級	柴田 玲央 (RSC)	○ 山口 瑠
フェザー級	佐藤 楓汰 (WP)	○ 岡 聖
ライト級	○ 森貞 宏太 (WP)	原田 雪舟
ライトウェルター級	○ 渡辺 龍大 (WP)	立川 久遠
ウェルター級	○ 牧野 蓮 (WP)	桐越 舜
ライトミドル級	○ 中島 鉄人 (WP)	高田 成之介
ミドル級	○ 川端 響喜 (WP)	荒木 陽仁

★第5戦(7月13日) 中央大(4-5) 拓殖大

ミニムム級	○ 波多野 陽 (WP)	安食 諒哉
フライ級	近藤 良 (RSC)	○ 山口 庵莉
バンタム級	柿沼 力生 (WP)	○ 山下 遥輝
フェザー級	大島 愛都 (RSC)	○ 篠田 覇時
ライト級	○ 森貞 宏太 (ABD)	山崎 湊
ライトウェルター級	○ 渡辺 龍大 (WP)	月東 佳生
ウェルター級	牧野 蓮 (RSC)	○ 六井 和
ライトミドル級	○ 中島 鉄人 (WP)	堀田 陸志
ミドル級	川端 響喜 (WP)	○ 鳥谷部 魁

(注) WP=判定(ポイント)勝ち、RSC=技量の差の大きさや負傷で試合続行不可能と判断したレフェリーによる勝敗宣告(プロのTKOに相当)、DISQ=失格による勝利、ABD=相手やセコンドからの棄権による勝利。記録は関東大学ボクシングリーグ戦の公式サイトより抜粋

の魅力、やりがいを3人に尋ねると、学生生活の中で、ハードなスパーリングや地道なトレーニングに普段からともに打ち込み、寮生活を送りながら芽生えていく絆をその原動力に挙げた。

練習は週6日、ボクシング道場で一日2、3時間行い、シャドーボクシング、マスボクシング(8割程度の力で行うスパーリング)、敏捷性を鍛えるフィジカルトレーニングなどに汗を流す。

牧野選手は「中大でかけがえのないメンバーに出会えた」と感謝し、「リング上では一対一の勝負だけれど、リーグ戦(団体戦)は絶対に負けたくないと思っていた」と力を込め

◆ Profile

駆け引き、心理戦がボクシングのだいご味

森貞宏太選手(主将)

もりさだ・こうた。愛媛・新田高卒、商学部3年。身長174センチ。階級はライト級(リミット60キロ)。7、8キロの厳しい減量を経て試合に出場する。高校時代はインターハイで3位(ライト級)の実績がある。

ボクシングスタイルは前に出るファイター。相手も前に出てくるタイプの選手の場合はアウトボクシングで対処する臨機応変さも備えている。「ボクシングは単なるパンチの応酬ではなく、駆け引きや心理戦の要素の大きいスポーツ」と競技の魅力を訴える。

気持ちを強く持ち、泥くさく戦う

渡辺龍大選手(前主将)

わたなべ・りゅうだい。群馬・伊勢崎工高卒、経済学部4年。身長174センチ。階級はライトウェルター級(リミット63.5キロ)。試合では普段の体重から約5キロ減量する。高校2年のインターハイ(バンタム級)で個人ベスト16。

ボクシングスタイルは、近距離での打撃戦に主眼を置く「インファイト」。「気持ちを強く持って泥くさく戦う」のが身上という。主将として部員全員の考えやモチベーションを把握し、チームにポジティブな雰囲気を作ろうと意識していた。「ボクシングは地道に努力した人が勝つ競技。対戦した者同士でないと分からない感情が生まれるところが魅力」と話す。

手数ของ多さ、スタミナと馬力が強み

牧野蓮選手(前副主将)

まきの・れん。静岡・浜松工高卒、商学部4年。身長172センチ。階級はウェルター級(リミット67キロ)。試合には普段より約4キロ減量して臨む。高校時代は静岡県代表として国体出場(ライト級)の経験がある。

ラウンドのラスト30秒で、手数を多く出せる馬力、スタミナが自慢。丈夫に産み、育ててくれた両親に感謝しているという。今回の法政大戦は、自身のボクシングキャリアの中で一番の勝ち方だったと振り返る。



(写真左から) 森貞宏太選手、渡辺龍大選手、牧野蓮選手

た。森貞選手も「団体戦を行うのは大学(同士の対戦)がメインで、勝てば喜びも倍増する」と話す。団体戦に闘志を燃やせる理由について、渡辺選手は「監督、コーチ、OBなどのチームを支えてくださる方々への思いをもって全員で戦えるからです」と教えてくれた。

## 「感謝の気持ち」忘れずにリングへ

渡辺選手、牧野選手ら4年生は部を引退し、後輩にチームを引き継いだ。

法政大戦の21年ぶりの1部リーグ勝利は、渡辺選手にとって「ボクシングを続けてきて一番うれしかった」という経験だった。渡辺選手は、「OBをはじめ、さまざまな方に喜んでいただいた」と感謝しながら、後輩たちに「4位という結果をバネにして、来年はさらに上位を目指してほしい」と期待する。

牧野選手は「今回のリーグ戦で優勝した駒澤大に勝ったことは、チームとして自信になる。来年の戦いが楽しみ」と笑顔を見せた。さらに、「周囲への感謝の気持ちを胸に試合に



朗らかに取材に受け答える3人。(写真左から) 渡辺龍大選手、牧野蓮選手、森貞宏太選手=多摩キャンパス第一体育館・ボクシング道場

挑み、ピンチをしのいで勝利したことがあった。(後輩たちも) そうした思いを忘れずにリングに上がってほしい」とも。

先輩2人にエールを送られた新主将の森貞選手は、「4年生がチームを引っ張ってくれての4位はうれしかった。(来年は)王座を目指してやっていきます」と抱負を話している。

## 取材後記

## ボクシングと向き合う真摯な姿勢、深い情熱

学生記者 吉田未来(理工3)

2024年6月8日、ボクシングの聖地といわれる後楽園ホール(東京都文京区)に足を運び、関東大学ボクシングリーグ1部の法政大戦を観戦した。緊迫した雰囲気の中で、ホール中央のリングに多くの観客の視線が集まっていた。試合開始のゴングとともに、リングを熱狂が包む。

9つの階級別に中大、法大の選手による熱戦が続き、中大は3-1とリードした後、ライト級の森貞宏太選手(主将)、ライトウェルター級の渡辺龍大選手(前主将)、ウェルター級の牧野蓮選手(前副主将)が3連勝した。6-3で勝利した瞬間の会場の盛り上がりから、かつてないような迫力を感じたことを鮮明に覚えている。中大にとって関東大学リーグ1部で実に21年ぶりという“復活”の勝利となった。

渡辺選手、牧野選手、森貞選手への取材を通じて、競技への真摯な姿勢と深い情熱を感じた。ボクシング部員はともに寮生活を送る中で絆が生まれ、多くの人に支えられてリングに上がっている。3人の言葉から、個人としての成長だけでなく、チームで戦う意義を強く感じていることがわかり、それが非常に印象的だった。

リーグ戦前は決して高くなかった評価を覆した背景には、ボクシング部内のこの一年の明確な変革があった。以前から「自主的に動く」という風土は根付いていたが、学年間の“風通し”をよくして、選手が学年の隔てなくアドバイスを求め合い、積極的に交流を図る空気が作られた。自主性はさらにチーム内に浸透した。

渡辺選手は「(4-5で惜敗したリーグ最終戦の)拓殖大戦では、それぞれが抱えていた課題を乗り越え、チームの集大成にふさわしい試合ができた」と胸を張り、表情に達成感をにじませた。

### 団体戦の魅力「仲間のために勝つ」

私には「ボクシングは個人戦」という固定観念があった。取材を経て、それは180度変わった。「みんなのために勝ちたいという一心で、2年前に負けた相手に勝つことができた。法政大戦はこれまでのキャリアで一番良い試合ができた」と語った牧野選手は、けがが続いて競技をあきらめそうになった時期があった。そんなとき、チームの仲間が支えになり、今日まで頑張れたという。チームの結束力が伝わる印象的なエピソードだった。

新チームの主将となった森貞選手は「4年生が作ってくれた明るい雰囲気などは継続し、より自主性の高いチームを作っていきたい」と抱負を話した。中大は今回のリーグ戦で、優勝校の駒澤大に勝利した。森貞選手は、それをチームの財産、自信に変えて、2025年は個人もチームも日本一の高みを目指すという。

選手3人のボクシングにかける熱い思いと、互いに仲間として支え合う姿勢に深い感銘を受けた。ボクシング部の選手たちがどう成長し、戦績を上げていくか。今後の活躍を楽しみに期待を膨らませている。



花束を手に両親に感謝の言葉を述べる松川晟士主将(右)



保護者と部員、監督、コーチらが参加した「感謝の集い」=2024年6月29日、東京アクアティクスセンター

# 「21年間の思い込め、ありがとう」 保護者への思いを言葉で伝える

## 水泳部伝統の「感謝の集い」開催

水泳部伝統のセレモニー「感謝の集い」が2024年6月29日、3年前の東京五輪・パラリンピック会場となった東京アクアティクスセンター（東京都江東区）で開催された。水泳部員が日頃の感謝の思いを言葉にして直接、保護者に伝えた。選手たちの言葉の後、父母らがメッセージを送り返した。

### 「スピーチ力」鍛える狙いも

この日、アクアティクスセンターで開かれた「第69回日本大学・中央大学対抗水泳競技大会」の終了後、感謝の集いは同センター内の一室で開かれた。大会では、選手の出身



両親に感謝の言葉を述べる長森流楓選手(右)



日大との対抗戦の観客席で応援する保護者ら

地である全国各地から訪れた保護者約60人が観客席で声援を送り、対抗戦は日本大学178点、中央大学112点で、今年は日本大学の優勝で幕を閉じた。

感謝の集いがいつ頃に始まったセレモニーかは定かではないものの、水泳部の高橋雄介監督(理工学部教授)によると、日本学生選手権で初優勝した1994(平成6)年にはすでに開催されていたというから、30年以上の歴史を重ねてきた大切なセレモニーである。

水泳部員と保護者、高橋監督やコーチ、スタッフらが参加し、司会進行は森谷暢コーチ(商学部准教授)が務めた。セレモニーの冒頭、高橋監督から、日大との対抗戦が以前

は5月に開催されていたため、「母の日」「父の日」を兼ねて、感謝の言葉とカーネーションを贈っていたことが説明された。部員が保護者に感謝の気持ちを伝える場を設けるとともに、社会人として必要な「スピーチ力を鍛える」ことが主眼だという。

### 涙ながらに…父母のために泳ぐ

両親と向き合ってマイクの前に立った主将の松川<sup>せいじ</sup>晟士選手(バタフライ、広島城北高卒、法4)は、「(部活動で)水泳するのはあと2カ月。今までは自分やチームのためだけに水泳してきたが、残りのレースは21年間の思いを



両親を前に涙ぐむ上園温太選手(右)

込めて、お父さんとお母さんのために泳ぎます。いつもありがとう」と涙ながらに語りかけ、母親に手紙と花束を手渡した。

松川選手の父親は、「今年に入って最後のこと(息子の引退レース)を想像すると、夫婦でいつも泣きそうになっています」と胸の内を語り、「インカレでは父母会の会長として、皆さんのお力添えをいただきながら、選手たちの後押しをしたい」と続け、感激した面持ちだった。

バタフライの長森流楓選手(熊本・九州学院高卒、文2)は、「口数は多くはないけど大事な言葉をくれるお父さんと、おせっかいがすぎるお母さんの存在はとても大きいよ」と感謝し、「良い結果は出ていないけれど、こっちでちゃんと頑張っているから、もう少し待っていてね。いつもありがとう」と、笑顔で両親に手紙と花束を手渡した。

会場も和やかな雰囲気にもまれ、長森選手の父親は、「娘が精いっぱいチームのために応援する姿を見て、水泳部で競技力はもちろん、人間力も高めていただいているのだなと感じました。感謝しております」と話した。両親の目には光るものがあつた。

### 水泳部は「ファミリー」な環境

パラ水泳・背泳ぎの上園温太選手(兵庫・須磨学園高卒、商1)は、「僕の人生は1人では何もできないくらい体が弱くて、親の手伝いがなくて何もできなかった。今まで支えてくれて、こうやって元気に過ごせているだけで幸せです」と胸に響く言葉で気持ちを伝え、「これからもできることはしっかりと頑張っ、て、幸せな気持ちにさせてあげられるように頑張ります」と、目を真っ赤にしながら感謝の思いを伝えた。

「息子がこうやってまじめに私たちに話をしたのは、初めてのような気がします」と切りだした上園選手の父は、「高校を卒業するまでの18年間、一緒に生活していましたが、いきなり東京に行くと言い出し、1人で生活していけるのかと心配していました。この場に立ち、水泳部はファミリーな環境だと思いました。人間性にあふれた皆さんのお話を聞いていて、先輩や同期の皆さんがいてくれたら大丈夫だと安心しました」と話した。

参加した部員38人が保護者に感謝の言葉を伝えた後、阿部太輔コーチ(理工学部助教)らコーチの挨拶、学生スタッフの紹介があり、水泳部員と保護者が円陣を組んで声出しを行い、セレモニーはフィナーレを迎えた。

### 中央大学学友会体育連盟水泳部

1919(大正8)年創部。高橋雄介監督、松川晟士主将。部員数48人(選手39人、学生スタッフ9人)。1956年メルボルン五輪・男子800メートルリレー4位入賞の野々下耕嗣をはじめ多数のオリンピックを輩出し、1960年ローマ五輪・男子800メートルリレー銀メダルの藤本達夫ら6人のメダリストを生んでいる。パラ・アスリートの育成にも力を入れ、日向楓選手(理工1)は、2024年パリ・パラリンピックの男子50メートル背泳ぎ(S5)で7位入賞するなど活躍した。日本学生選手権では1994～2004年に史上初の競泳男子団体総合11連覇を達成、その後も4回優勝している。通算の優勝回数15回は、日本大39回、早稲田大31回に次ぐ記録。



日本一だ！優勝の瞬間、歓喜にわく軟式野球部ナイン

# 猛打爆発で 全日本学生選手権を制覇 軟式野球部が2年連続5回目

## 牧温人選手（法3）は MVP&最優秀投手賞の2冠

「マネジャー一同」に最優秀助演賞の栄誉

軟式野球部が第47回全日本学生軟式野球選手権大会（8月24～26日）で2年連続5回目の優勝を果たした。決勝スコアが23－2、準決勝は10－3と猛打で相手を圧倒。チーム全員が打撃力強化に力を注いだ成果を発揮し、栄冠を勝ち取った。

最高殊勲選手賞（MVP）、最優秀投手賞の2冠を獲得したチームの大黒柱で主将の牧温人選手（法3）と、「中央大学マネジャー一同」として最優秀助演賞に輝いたマネジャーの鈴木富花さん（経済2）に、喜びや強さの秘密などを聞いた。

「木製」で練習、実戦で打棒磨く  
「実力主義」を徹底

2023年秋季の東都リーグで最下位に沈んだ悔しさが、チームの打撃力強化のきっかけだった。実戦で使うウレタン製のバットより約200グラム重く、「芯に当たらなければ飛ばない」（牧選手）という木製バットでの練習を全員が徹底した。8月上旬の合宿を経て、前年は2試合だけだった全日本直前の練習試合を8試合こなし、実戦で生きた投手の球を打つことにより、打棒に磨きをかけたという。

牧選手は準決勝（東海学院大戦）の二回表、先頭打者として高めの速球をたたき、右中間を破る二塁打を放った。これを突破口にゲームの流れは一気に中大に傾き、打線に火が



MVPを獲得した牧温人選手

ついた。牧選手は「強い相手と考えていたので、何より先取点が欲しかった」と先手必勝を説き、全日本で一番に記憶に残る自身のプレーに挙げた。

牧選手が主将を務める今年のチームは、「実力主義」を徹底してきた。主将と副主将2人、ゲームキャプテン2人の下級生を含む計5人の話し合いでスターティングメンバーを決めるが、練習や練習試合で結果を出せば、学年に関係なく試合に出場できるようにした。

理由は「選手同士の競争力、やる気を上げたかったから」（牧選手）という。これまで練習をオフにしていた雨天の日も室内で練習したり、練習を撮影した動画を選手同士がSNSでやり取りして可視化し、刺激し合ったりと、全員が力をつけるための努力を惜しまなかった。

### 「大学からピッチャー」頭角を現す

チームの全日本2連覇とともに、牧選手は2年連続でMVPと最優秀投手賞を受賞した。牧選手は「チームの優勝と2冠

を目標に頑張ってきたので、(閉会式で受賞者として)名前を呼ばれ、ほっとしました。2年連続は自分しか達成できませんから、誰かに取られなくなかった」と、少し冗談めかして笑った。

本格的に投手を始めたのが中大入学後というから驚きだ。コントロールの良さが身上で与四球は少ない。得意のスライダーで打者を空振りさせられるのも強みだ。ポジションは中大附属中時代が捕手、中大附属高時代は主に遊撃手だったが、もともと肩は強く、速い球を投げている。「マウンドの投手の姿が格好いいと思って、『ピッチャーをやりたい』と高校の頃から思っていた」という。

優勝を飾った2024年春季の東都リーグでは、MVP、最優秀投手賞、首位打者、本塁打王、ベストナインとタイトルを獲得し、「軟式の二刀流」と呼べる大活躍だった。首位打者の打率.538は歴代のリーグ最高打率だったという。

中大卒業後も野球は続け、軟式野球の社会人大会出場を目指すという。中大1年のときは母校の中大附属高野球部で学生コーチを務めており、野球の指導者になる夢も抱いている。

## 中央大学軟式野球部

部 長	原 正人	
OB 会 長	蔣基 考昭	
監 督	岩下 誠司	
学生コーチ	谷口 太輝(商4)	
主 将	牧 温人(法3)	投手
副 主 将	福島 諒平(文3)	内野手
	織田 尚(商3)	外野手
	中田 千晴(経済2)	内野手
	立谷 俊太郎(法2)	投手
	海老沼 樹喜(経済2)	海内野手
	片倉 裕文(法2)	外野手
	寺沼 樹(商2)	捕手
	小牧 正宣(法2)	投手
	小牧 颯太(経済2)	内野手
	井出 都斗(国際経営2)	投手
	山村 駿悟(経済2)	内野手
	山本 宗二朗(経済2)	外野手
	上野 雄也(総合政策2)	捕手
	坂口 晃一朗(商2)	坂外野手
	林 輝一(経済2)	外野手
	米沢 哲朗(理工2)	外野手
	香川 太佑(経済1)	内野手
	安藤 大惺(経済1)	内野手
	杉浦 周作(文1)	投手
	若松 虎太郎(文1)	外野手
	田邊 優河(商1)	投手
	塚本 秀太(文1)	内野手
	藤井 大翔(総合政策1)	外野手
	田家 孝志(文1)	投手
	福田 竜之介(商1)	内野手
	市川 春来(商1)	捕手
	本藤 颯真(経済1)	投手



### ◆ Profile

#### 牧温人選手

まき・はると。中央大学附属高卒、法学部3年。178センチ、79キロ。右投げ右打ち。野球を始めたのは幼なじみに誘われた小学生の頃。水球、硬式テニスなどの経験もある。中途半端が嫌いで、何事も手を抜かない性格だという。

MVPのトロフィーを手にする牧温人選手



## 優勝への練習ともに乗り越え、達成感と感動

### 最優秀助演賞の「マネジャー一同」 鈴木富花さん(経済2)

優勝したチームを支えた「マネジャー一同」が最優秀助演賞を受賞した。現在のマネジャーは10人。受賞について、マネジャーの一人である鈴木富花さんは「選手のおかげでしかないのですが、誇らしい気持ちになりました」と奮闘した選手たちに感謝し、「マネジャーも優勝への練習と一緒に乗り越えてきたつもりです。部活動としての達成感を覚え、感動しました」と喜びを語った。

プレーの動画撮影、練習時間の測定、ボール運び、ボール磨きなどと、マネジャーは日々、地道な仕事に携わっている。マネジャーの仕事は、基本的に結果が成績として目に見えにくい仕事であるが、選手が勝ち取った優勝により助演賞を得て「マネジャーの仕事に成果をもたらしてくれた」と、鈴木さんは受け止めている。

「今年のチームは出場機会が増えて、皆が生き生きしている。全日本のベンチでも、もり立てようという雰囲気があった」と続けた鈴木さん。これからもマネジャー全員が協力し、全力で選手たちをサポートしていくつもりだ。



閉会式でブラカートを手に先頭で行進するマネジャーの鈴木富花さん

## 第47回全日本学生軟式野球選手権大会

(2024年8月24～26日、スリーポンドスタジアム八王子ほか)

### 〈決勝〉

広島経済大	0 0 0	1 0 0	1 0 0	2
中央大	6 2 1	0 7 5	0 2 X	23

### 〈準決勝〉

中央大	0 1 2	3 2 1	0 0 1	10
東海学院大	0 0 0	2 0 1	0 0 0	3

### 〈2回戦〉

九州大	0 0 0	0 0 0	3	3
中央大	0 6 0	0 3 0	1X	10

(規定により七回コールドゲーム)

(注) 中大は1回戦不戦勝





# 準硬式野球部 8年ぶり 学生日本一、13回目の栄冠

光るプレーで勝利導く 相野七音外野手(文3)、岡部匡十捕手(経済2)に聞く

準硬式野球部が8月の第76回全日本大学準硬式野球選手権大会で13回目の優勝を飾り、一番の目標に掲げている大会で8年ぶりに頂点に立った。主力プレーヤーとして優勝に貢献した相野七音選手(文3、新主将)、岡部匡十選手(経済2)の2人に、勝因や一球にかける思い、新チームの目標などを尋ねた。

## 因縁の相手に勝ち波に乗る

1回戦の相手が2022年、2023年と同じ全日本の舞台で敗れた因縁の日本大だった。「意地でも勝つ」(相野選手)と気合十分に挑んだ対決で、2人がグラウンドで躍動した。

左翼手の相野選手は四回裏二死二塁のピンチで、自身の前にふらふらと上がった打球を飛び込んでキャッチし、相手の追加点を阻止。「泥くさいプレーができた」と振り返り、小泉友哉監督も「ピンチを救ってくれた」と称えた。

六回表、今度は岡部選手が二死一、二塁の反撃機で左前適時打を打ち、試合を1-1のふりだしに戻す。「前の打席でチャンスを逃していた。絶対に(ランナーを)かえそうと思っていた」と岡部選手。塁上からベンチの仲間に向かってガッツポーズを繰り返した。

日大に3-2で競り勝ち、波に乗ったチームは頂点に駆け上がった。相野選手は準決勝の愛知大戦でも、同点の左越え二塁打を放つなど、劣勢のチームを盛り立て、活躍が光った。

## 夏の秋田合宿で力つける

準硬式野球部は選手32人全員が寮生活で寝食を共にしている。他大学では見られないという全寮制は選手間に強い絆を生み、練習メニューも選手同士で考える。相野選手は「ワンプレー、一球を大切に、試合でのミスはもちろん、練習で出たミスも妥協せず、とことん原因を追究する」と語り、全員が野球に厳しく取り組んでいるという。

そうした姿勢の積み重ねが、今春まで9季連続の東都

文部科学大臣杯  
第76回全日本大学準硬式野球選手権大会  
(2024年8月24~28日、  
佐賀県立森林公園野球場ほか)

〈決勝〉

九州産業大	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
中央大	0	1	0	0	0	1	0	0	X	2

〈準決勝〉

愛知大	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
中央大	0	1	0	0	3	3	0	0	X	7

〈準々決勝〉

同志社大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中央大	0	0	2	0	0	0	0	0	X	2

〈2回戦〉

中央大	0	2	0	1	0	0	0	0	1	4
徳島大医学部	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1

〈1回戦〉

中央大	0	0	0	0	0	1	1	0	1	3
日本大	0	0	1	0	0	0	0	0	1	2



優勝カップを手に笑顔の相野七音選手(左)と岡部匡十選手



相野七音選手



岡部匡十選手

◆ Profile

相野七音選手

あいの・なおと。岩手・花巻東高卒、文学部3年。171センチ、71キロ。右投げ右打ち。左翼手。秋からの新チーム主将。2024年東都秋季リーグ・ベストナイン。負けず嫌いな性格で、「どれだけ自分が活躍してもチームが負けては何にもならない」と話す。高校時代の監督にかけられた「失敗が一番の成功への道」という言葉を常に胸に留めている。

岡部匡十選手

おかべ・まさと。佐賀高卒、経済学部2年。175センチ、69キロ。右投げ右打ち。捕手。2024年東都春季リーグの首位打者(打率.409)、ベストナイン。捕手としては相手打者の心理面を揺さぶる「ささやき戦術」が得意。「投手の良さを引き出すリードに長けている」と、小泉友哉監督の信頼も厚い。

リーグ制覇というたくましさ、伝統の力を培ってきた。全日本前、恒例の秋田での夏合宿も、実戦に即したノックや連係プレーなど、選手が自主的にメニューを決め、全日本の戦いにつながる内容の練習を意識したという。

中大に入り、プレーヤーとして伸びた点を2人に尋ねると、「走塁。足の速さは(高校時代と)変わらなくても、先の塁を狙う一瞬の判断力が養われた」(相野選手)、「選球眼が向上し、四球を多く選べるようになった」(岡部選手)と教

えてくれた。

リーグ新記録となる10季連続優勝を目指した東都秋季リーグは2位(9勝4敗)で惜しくも快挙を逃した。相野選手と岡部選手は「2025年は全日本連覇とともに、『10季連続』の一步目となるリーグ優勝を無敗で果たしたい」と意気込む。相野選手は「キャプテンとして常にナインのことを考えながら、チーム優先で取り組んでいく」と来季を見据えている。



(写真右から) 感謝状を贈られた児玉剛始ヘッドコーチ、根本竜男監督、高瀬由祐副主将 (左は山並俊彦・蕨警察署長)

# 漕艇部に警察署から感謝状

## おぼれた高齢男性を的確な判断で救助 埼玉・戸田市の合宿所近くの荒川

### 根本竜男監督、児玉剛始ヘッドコーチ、高瀬由祐副主将 (法3) の3人

漕艇部(ボート部)の根本竜男監督(1991年卒)、児玉剛始<sup>たけし</sup>ヘッドコーチ(1995年卒)、副主将の高瀬由祐<sup>ゆうすけ</sup>選手(法3)の3人が荒川で練習中、おぼれた男性を救助したとして、埼玉県警蕨警察署から感謝状を贈られた。高瀬副主将は「とっさの判断で救助できた。命の尊さを改めて感じました」と話している。

#### 3人が関係して冷静、迅速に行動

3人は9月28日早朝、埼玉県戸田市の漕艇部合宿所と戸

田艇庫に近い荒川河川敷で、練習艇に伴走するモーターボートに乗り込んだ際、おぼれている高齢男性に気付き、救助した。蕨警察署で10月21日に感謝状の贈呈式があり、山並俊彦署長から3人に感謝状が手渡された。山並署長は「冷静、迅速、的確に行動していただいたことが救助に結び付いた。3人の連係した勇気ある行動により、尊い命を救うことができ、感謝申し上げます」と謝意を述べた。

高瀬副主将は「人の命が救われたことにほっとしています。中学・高校で学んだAED(自動体外式除細動器)の知



感謝状を手渡される高瀬由祐副主将

### 男性救助の経緯

## 救命浮き輪投げ、ボートでけん引 高瀬副主将が110番通報

2024年9月28日午前6時15分ごろ、埼玉県戸田市の漕艇部合宿所と、戸田艇庫から約700メートル下流の荒川河川敷(左岸)で、練習艇に伴走するモーターボートに乗り込んだ根本竜男監督、児玉剛始ヘッドコーチ、副主将の高瀬由祐選手(法3)の3人が、約80メートル離れた護岸から水中に何か落ちた音がしたことに気付いた。

音の方向を見ると、70歳くらいの男性が水面に顔だけを出し、もがいている様子が見えた。すぐにボートで近づき、積んでいた救命浮き輪を投げると、男性は浮き輪のひもにつかまった。「がんばれ。がんばれ」と声をかけながら、ゆっくりと岸までけん引し、引き揚げて保護した。高瀬副主将が「荒川でおぼれた老人がいます」と110番通報し、駆け付けた警察官に男性を引き渡した。男性は受け答えができ、けがなどもなかった。

この約10分前にも、同じ男性が岸から約1メートルの場所で、スエット姿のひざ下まで水に浸かり、体をふらふらさせていたため、岸に上がるよう声をかけていた。このとき男性は自力で土手に上がっていったという。

根本監督によると、当時は干潮の時間帯で水深1~1.2メートル程度とそれほど深くなかったことと、暑い日が続ぎ、水温も低くなかったことが幸いしたとみられる。川底は泥が堆積し、足で踏ん張るのが難しい状態だった。

この前日に降雨があって川が濁り、本来なら荒川での練習を避ける予定だった。しかし、大学1、2年生が出場できる10月の全日本新人ローイング選手権大会に向けて、川でのトレーニングを希望した男子エイト、女子クォドルプルの選手たちの気持ちを酌み、当日は練習艇や伴走ボートを出した。こうした巡り合わせも重なって、人命救助に結び付いた。

識なども生かされて対応できた」と当時を振り返り、「感謝状をいただけることになり、命の尊さ、大切さを実感した。今後も、いつでもどこでも(不測の事態に)対応できるように備えたい」と語った。

### 安全第一を徹底

漕艇部では普段から、転覆、浸水など万が一のときも「艇

はよほどのことがなければ沈まない」「体力を過信して岸まで泳いでいけない」といった安全確保を徹底して指導している。

今回の救助を一つの教訓として、根本監督は「安全第一を継続していきたい。(水上では)どこに危険が潜んでいるか分からないので、(今回のような)人命にかかわる事態があれば、しっかり連携して対応できるチーム、個人個人にしていきたい」と話していた。